

魂の魂

—— エピクロスとルクレティウスの生命論 ——

瀬 口 昌 久

はじめに

遺伝子工学や生命工学の急速な進展は、難病に苦しむ人たちに福音をもたらすように喧伝される一方で、生命操作の倫理性、末期医療における延命治療の問題、臓器移植の是非、クローン人間実現の危険性といった面から、科学技術が生命や身体を「物」とみなして扱っているとの批判がたえない。科学のもたらす生命情報と個人の生命理解とが分裂し、生命についての統一的な像を切り結ぶことが難しい。近代科学はその基本的構図として採用した物質的世界像から、「生命」を原理的に排除することによって目覚ましい有効性を獲得してきたが、今日その構図によって生命を取り押さえることの困難さに直面しているといえるだろう。しかしながら、ひとたび世界の根本的なあり方からは原理的に排除した生命を、近代科学の枠組のなかに再び位置づけるという課題は容易な妥協をゆるさぬ長い格闘を要する問題である。そのような問題の端緒は、16、7世紀の近代科学の誕生期において、エピクロスやルクレティウスの古代原子論が基本的な世界像として採用され、アルキメデスの数学的技法と結びつき、メカニカルな物質的世界観が構築された時にすでに胚胎している。小論は、エピクロスとルクレティウスの魂論の差異に注目し、古代原子論において、生命や魂がどのように考えられていたかを検証し、その問題点を指摘することによって私たちの生命理解を少しでも深めることを目的としている。

< I > エピクロスからルクレティウスへ : sperma と semina

ルクレティウスがその著書『事物の本性について』(De Rerum Natura, 以下 DRN と略す)で、エピクロスを真理の発見者と呼び、彼と競うので

はなく、その足跡に従うと明言し（Ⅲ. 1-30）、その傾倒ぶりを繰り返して述べているので（Ⅰ. 62-79, Ⅲ. 1042-1044, Ⅴ. 1-54）、ルクレティウスの論点はすべてエピクロスによってすでに示されていると考えられる傾向が今も根強くある。たとえば、ヘレニズム期の哲学に詳しい A. A. Long は、ルクレティウスを単なる賞賛者ではないとしながらも、ルクレティウスは独創的な思想家ではなく、エピクロスの著作にある論点を敷衍して説明しているにすぎないと位置づけている。¹⁾

しかしながら、ルクレティウスは、エピクロスよりもさらに深く自然現象の究明を積極的に押し進めているように私には思われる。²⁾ その手がかりは、原子論の要である原子を表すのに用いるエピクロスとルクレティウスの用語上の違いに現れている。ディオゲネス・ラエルティオスの『ギリシア哲学者列伝』十巻に残されたエピクロスの文献において、³⁾ 原子を表す用語は、不分割を意味する *atoma* が33回使用されている。そのほかには、構成要素を意味する *stoicheia* が原子の規定として1回（X. 86.4）あげられ、種子を意味する *sperma* が原子を指示するケースとして3回用いられているだけである（X. 39.1, 74.7, 89.5）。これに対してルクレティウスは、原子を表す語として *atoma* のラテン語訳である *individua* や *atomi* という語は一度も使っていない。⁴⁾ それに代わって使用されているのは、物体一般を広く意味する *corpora* の457回をのぞけば、種子を意味する *semina* が110回、万物を生み出す元のものとして *genitalia* が15回、物質や素材を指す *materia* が78回、最初の物を意味する *primordia* が72回、最初の物や原理を意味する *principia* (*primordia* の複数属格・与格・奪格形が詩の韻律にあわないために代用される) が85回、要素を表す *elementa* が23回、微小物体を意味する *corpuscula* が5回である。また原子の「形」を意味することから原子をも意味する場合もある *figura* が58回使用されている。

原子を指すエピクロスの用語が *atoma* にほぼ限定されていることを考えると、ルクレティウスが原子を指す言葉の多様性に驚かされる。それはギリシア語に比べてラテン語の言語としての貧困さを嘆くルクレティウスの言葉「ギリシア人のこの解しがたい発見がラテンの詩句では明確に表しがたい。われわれの言葉がとぼしく、事柄が新奇なため新語に多くたよらねばならないからである」（Ⅰ. 136, 831など）を、空とぼけや皮肉にさえ感じさせるほどである。この多様性はどのような意味をもつのであろうか。ルクレティウ

スがアトムを指す語をこのように多様な用語で述べねばならなかったことは、エピクロスのアトムの概念に、以上のような多義性が原子論のさまざまな局面で読み込まれるべきだと彼が解釈したことを意味するように思われる。そのさまざまな局面とは、果たしてエピクロスが想定して理論化をしていた範疇に収まっているのか、むしろ、ルクレティウスがその範囲を越えて理論を発展させているのではないか。その点を本論のモチーフに深く関連する *sperma* と *semina* という語に注目して検討しよう。

ディオゲネスの明らかな書き込みと思われる箇所 (X.66) を除くと、エピクロス自身のテキストで *sperma* が用いられるのは次の3箇所である。

- (1) まず第一に、あらゆるものからは何も生じない、ということである。なぜなら、もしそうでないとすると、何でもが何からでも生じて、種子はひとつ必要ではなかつたろうからである (X.38)
- (2) というのは、動物や植物やその他観察されるすべてのものが、それから生まれてくるであろうような種子が、これこれの世界のなかには含まれていたであろう (X.74)。
- (3) つまり、世界をつくるのに適したある種の種子が、一つの世界または中間界から、流れ込んできて、少しずつ結合したり、分節化したり、場合によっては、他の場所へ位置を代えたりすることによって、世界は生じるのである (X.89)。

(1)は「無からは何もものも生じない」というパルメニデス以来の重要な原理を論じた箇所である。「無からの生成」を認めてしまうと、あらゆるものからあらゆるものが生じるという容認できない事態が帰結する、との文脈で「種子」という言葉が使われている。それゆえ種子が、ある特定のものの生成に関わるものであることは推測される。しかしながら、種子についてはその後にも何も説明されてはいない。(2)は、世界宇宙が多数存在し、それらの別の世界においても、私たちの世界と同様の動物や植物が存在することが論じられる箇所である。種子は、現在の世界で私たちが目にするような動物や植物

を形成する元になるものとして述べられている。種子が生命をもつ動物や植物の生成に関与することを、エピクロスが示唆するのは唯一この箇所である。(3)のテキストでは、種子に生物的なイメージは特になく、述べられてきた種子がアトムであることが分かるだけである。以上の三つのテキストだけを基にしてさしあたって言うのは、アトムは種子とも呼ばれ、すべての生成の元になるゆえに、動物や植物の生成の元にもなるということであろう。

しかるにルクレティウスにおいてはどうかであろうか。上記(1)の箇所は、古代原子論研究の権威である C. Bailey なども注記するように、⁵⁾ 以下に引用する箇所でルクレティウスによって詳しく論証されている (DRN, I. 159-214)。

「なぜならもし無から物が生じたならば、すべての物がすべての種類のものが生まれることが可能となり、何物も種子 (semine) を必要としなかっただろうに。

まず海から人類が、大地からは鱗ある魚類が生まれ、
そして空からは鳥類が飛び出てきただろう。

牛やその他の家畜や、あらゆる種類の野獣たちが
きまりもなしに生まれ出て、耕地や荒地をしめただろう。

それぞれの木になる果実が一定していることもなく、互いに入れ替わり、
あらゆる木があらゆる実を生じることができただろう。

じっさい、それぞれのものに生成の元 (genitalia corpora) がないとしたら、それぞれにきまった母親が存在しうるだろうか？

だが実際にはすべてのものは一定の種子 (certis seminibus) から生じている以上、それぞれのものは、それぞれの素材 (materies) と基本物体 (corpora prima) を内にもつものからこそ生まれ出て光の岸辺にやってくるのである。」(DRN, I. 159-171)⁶⁾

ルクレティウスはこの箇所において、先のエピクロスの(1)から(3)の個々の論点を、一本の筋で結んで統一的に説明している。無からは何ものも生じないという根本命題は、生物がある一定の種子からしか生まれえないことによって例証されるのであり、その種子は一定の基本物体つまりアトムから構成される。生物の誕生や種の分化や固有性を支配決定するのが、基本物体の一定の

構成であることが明確にされているのである。それは「それぞれ一定の物には、それ独自の能力がある」(173) からにほかならない。

ここの議論を通して、この「一定」を意味する *certus* という語がキーワードであり何度も繰り返されている。⁷⁾ 「一定の基本物体から構成されたもの」という種子の概念は、生物種の各々の同型性を維持するものであるばかりか、以下にみるように、生物がある定められた季節に従って成育することを説明する原理としても活用されている。

「さらにまたなぜバラの花は、春に咲きいで、穀物は夏に熟し、葡萄は秋の招きに応じて実るのを私たちは目にみるのか？ それぞれ固有の時期に物の一定の種子が合流しあった時にこそ生まれ出でるもののはじめてその姿を現すからではないのか？ そのとき、季節がやってきて大地は生命に溢れ傷つきやすいこの若いものを安全に光の岸边にもたらすのではないのか？ もし、無から物が生ずるなら一定の期間 (incerto spatio) もおかず、また、都合の悪い季節にも、突然生まれ出ることであろう。」 (DRN. I. 174-181)

植物の成長が季節の循環に従う典型的な例として、一定の種子が一定の雨 (*certis imbribus*) に会うことによって大地に実りがもたらされること (192-3) が、あげられている。季節がめぐり春が訪れると枯れた大地が緑を取り戻し地上に命が溢れる、といった自然現象の回帰をもたらすのは、自然のもつ不可思議な生命力や神々の営みではなく、一定の素材からは一定の物が生ずるという原理であり、季節ごとにもたらされる一定の物体が、大地にある一定の物体と会合するからであると、ルクレティウスは明快に論じているのである。世界の基礎が原子と空虚であることが、いかにして自然界の秩序ある生命活動を説明するのかという反原子論者の問いは、ルクレティウスによってみごとに逆転されてしまう。私たちが経験する生命活動の秩序ある活動こそが、世界を構成し決定するのが物体であることの証にほかならないのである。

原子論と生命をもつ自然観とのこのような結合が、エピクロスによっても論じられていた可能性を否定しすることはできない。⁸⁾ しかしながら、ディ

オゲネスがエピクロスの著書としてあげているカタログには、直接的に動物や植物をとりあつかった書名は見られない (X. 27-28)。残された資料のなかでエピクロスが取り上げている自然現象は、雲や雨や雷といった気象現象や太陽や月の運行などの天界の構造であり、それらのマクロ的な説明から一挙に人間の感覚の分析や肉体や魂の構造の次元に絞られている。エピクロスの文献からは、私たちが経験している自然界の生命現象が彼の原子論によって説明されているとは結論づけられない。これに対して、ルクレティウスの著作には、大地に穀物や樹木が育ち野獣が生まれ、森の至る所では生まれたばかりの鳥がさえずり、牧場で家畜が子どもに乳を与えている (I. 250-260) といった牧歌的情景が、全編を通してふんだんに歌われている (II. 315-380, 661-675, 870-880, 1140-1170ほか多数)。ルクレティウスによって究明される世界は、天界や気象現象にはとどまらない、私たちを取り巻いている生命をもった生活世界なのである。そこにルクレティウスがエピクロスよりも自然世界への探求をさらに深めていることを見るのは不当ではないであろう。ルクレティウスによって「種子」という言葉が、明確な生物学的説明の意図をもって多用されていたこともそのことを支持する。ルクレティウスは、エピクロスが語り残した自然界の生命現象を、原子論によってより積極的に解明する努力をしているといえるだろう。その観点にたつて、次に生命論の中核をなす魂論について両者の比較を検証したい。

＜II＞ 魂論の差異

エピクロスは魂を次のように描いている。

「すなわち魂は微細な部分 (leptomeres) から成る物体であつて、(人間という) 集合体全体にあまねく行きわたつており、そしてそれは、熱 (thermon) とある仕方で混じり合っている風 (息) (pneuma) にたいへんよく似たものである。つまりそれは、ある点では風に似ているし、他の点では熱に似ているのである。しかし魂には、微細な部分から成り立っている点では、風や熱そのものよりもはるかにまさつていて、そしてそのことゆゑに、(人間という) 集合体の残りの部分 (身体) ともいさうよく共感している (sumpathes) とおころの、＜第三の＞部分があるのである。」 (X. 63)

この箇所から多くの注釈者たちは、エピクロスによると魂が物体であるアトムからのみ構成されており、具体的には熱 (thermon) と風 (息) (pneuna) と第三の名前のないより微細なアトム (akatonomaston) の三種のアトムの混合によって形成されていると解釈している。これに対してルクレティウスの魂論 (DRN, III) はどうか。次の二点においてエピクロスとルクレティウスが異なっていることが指摘されている。⁹⁾

(a) 魂の区分

エピクロスではディオゲネスの明らかな書き込み部分 (X. 66) を除けば、理性的部分 (to logistikon) と非理性的部分 (to alogon) の区別がなされていないが、ルクレティウスは魂を、精神の座である animus とそれに支配される anima に明確に区別している (III. 136-160)。animus は mens (思考、知性) とも呼ばれ (139)、胸の中央に位置している。他方の anima は全身に行きわたっている。

(b) 魂の構成要素の違い

ルクレティウスにおいては、魂を構成するアトムは3つではなく4つである。すなわち魂は、風 (息) (ventus, aura) と熱 (calor, vapor) と空気 (aer) と第四の名前のない (nominis expers) アトムから成り立っている。

まず(a)について。

エピクロスにとって、魂とは身体に生命を与える原理であり、魂は身体と共に生まれることによって、感覚能力をもち身体にも感覚を分け与えるものであった (X. 64)。他方で魂は感情や思考などの諸能力をもつ (X. 63)。だがエピクロスは、魂がもつ精神的機能と身体感覚機能や生命原理との諸関係を、まだ明確に意識していないように思われる。それらの機能の間の対立が意識されているとは読みとれない。けれども、身体感覚的機能と精神的機能が対立する場面を私たちは日常的に経験しているし、その対立が、魂を身体や物質から区別する証拠として論じられることがある。プラトンもまた、体が渇いている時に水を飲まないように空腹の時に食べないように、身体の状態に反して魂が行動を導くことがあることを、魂が身体や感覚的存在とは異なる実在であることを語る議論のひとつに用いている (『パイドン』 94b-95a)。

身体の状態や感覚に反する「魂の自発的働き」と見えるような人間の行動を、身体と魂をとともに物体とみなす原子論の立場からはどう説明するのか。ルクレティウスはその課題をはっきりと意識し、それに答えるために anima と animus の区別をなしているように思われる。

「その精神 (animus) はただ自分だけで知る力を持ち、魂 (anima) や身体が何ものかによって一緒に動かされないときでも、自分だけで喜びをもつ。そしてちょうど、私たちの頭や目が苦痛に攻められて痛んでいても、体全体がそれと共に苦痛に苛まれることはないように、同様に精神はしばしば自分だけで苦痛を感じたり喜びに元気づいたりする。たとえ手足や体に行きわたっている魂の他の残りの部分が、何か新しい感覚に刺激されなくても。」 (DRN. III. 145-151)

精神が身体から独立した働きを持つことは、両者が物体であることに何ら反しないとルクレティウスはここで説いている。身体の一部の痛みが身体全体の痛みではないように、精神も身体の一部でありながら、残りの身体とは異なる働きをすることがありうるのである。換言すれば、身体に対する精神の優位性を認めても、それは物体の質的機能的差異の問題であり、そのことで精神を物体でないとみなす必然はないということである。むしろ、精神が恐怖にうたれると、体中に行きわたった魂 (anima) がそれに共感し、全身に汗が流れ青ざめ舌がもつれ、手足の力が抜け、ときには卒倒までするように、直ぐに身体状況に響くことを私たちは経験している (152-160)。それほどまでに精神と魂と身体は一体に結ばれている。そのことはとりもなおさず精神や魂が身体と同じく物体であることの根拠であると、続けてルクレティウスは論じているのである。このように anima と animus の明確な区別においても、ルクレティウスの理論的前進が見られる。¹⁰⁾

次に(b)について。

なぜルクレティウスは、風(息)と空気を区別する必要があったのか。以下の彼の短い説明はその理由を明らかにしてくれていないように思える。¹¹⁾

「まさに死なんとしている人からは、何かかすかな風（息）（aura）が熱（vapore）をまじえてにげてゆき、熱は空気（aer）をともなって去る。空気とまじりあっていない熱（calor）は存在しない。」（DRN. III. 232-234）

動物の生命の徴である一定の体温と呼吸作用が、熱と風（息）を魂の構成要素と考えさせるのに影響していることは間違いないであろうが、風（息）と空気の区別の必要性はあまり明確ではない。

ここでは伝染病で死にゆく人間がリアルに想像されている、と考えることができるかもしれない。高熱のための荒い熱い息づかいが、だんだん静かになってゆく。やがて目に見えるような息づかいが消える。しかし、体にはまだ熱が残っている。その熱はもはや息によって放出されるのではなく、体のすぐ外をとりまわっている空気（IV. 934）のなかに失われてゆき、やがて冷たい軀だけが残される。臨終のより凄惨な描写をルクレティウスは六巻のエピローグで述べている（VI. 1091以下）。アテナイの街を襲う恐ろしい疫病の姿である。ルクレティウスによると伝染病は腐った空気によって運ばれる（VI. 1120）。疫病で次々に死にゆく人間の実際の観察が、ルクレティウスに風（息）と空気の区別をさせたのかもしれない。

しかし、以上のことは推測の域をでない。風（息）と空気の区別を考えるときに、空気を火（ここでは熱）とともに、世界を構成する四元素とみなしてきたギリシア哲学の伝統をむしろ考えるべきかもしれない。ルクレティウスにとっても息をするときに体内に吸収されるものは空気にほかならない（IV. 935-8）。そうであるならば、風（息）というものを空気からは独立したアトムとして、魂の不可欠な構成要素として残すことの方が奇異な感を与えるだろう。しかし、その空気を動かす物は何か。私たちは、息を動物の呼吸作用とみなすが、ルクレティウスにとっては、息は水分を含んだり熱を帯びたりする微粒な物体であり、空気と混じり合い、それら他のアトムを運ぶ機能をもつ運動性にすぐれた独立のアトムと考えられたのであろう。風と空気の区別に続く感覚の説明においても、第四の名のないアトムがもたらす運動を風（息）と熱のアトムが受け取り、それから後に空気のアトムが動きだすと段階づけられている（III. 246-248）。ルクレティウスは風（息）を空気から明確に区別した上で、呼吸作用という生命現象に深く結びついた風（息）を魂（生命原理）を構成する不可欠なアトムとして再確認したと考えられる。

＜Ⅲ＞ 名前のないアトム

前章で述べたようなエピクロスとルクレティウスの魂論の違いよりもさらに重要な発展が、ルクレティウスによって試みられている。それは、魂を構成する名前のないアトムの本性に関してである。エピクロス学派は、このアトムに名前がないことをかなり批判されたようだが、それには「それがあまりに名状しがたく精妙であるので、思弁的に名前を与えることができない」といったおおよそ満足ゆかない答えしか与えていないと言われている。¹²⁾ 便宜上、ここでは第四のアトムと呼ぶ。第四のアトムは、ルクレティウスでは次のようなものとして要請されている。

「けれどもこれら（風・空気・熱）が全部集まっても感覚を生むには十分ではない、なぜならそのどの一つとして、感覚をもたらす運動と（精神の）思ひめぐらす考えとを生み出しうるとは、精神は認めないのだから。¹³⁾

それゆえ、これらのものにつけ加えて、何か第四の本性もまた存在しなければならぬ。そのものは全く名前をもっていない。

そのものよりももっと動きやすく、もっとかすかなもの、もっと小さくもっと滑らかな要素（*elementis*）からできているものはない。そのものが最初に感覚の運動を手足に伝えるのだ。

なぜならそれは、小さな形（*figuris*）からできているのために、最初に動かされる（*cietur*）のだから。それから熱と風の目に見えぬ力がその運動を受けとり、ついで空気が、それからすべてのものが動き出す。」（DRN. III. 238-248）

第四のアトムは、感覚をもたらす運動（*sensifer motus*）と思考を生み出すものとして必要であり、そのことが可能であるのはそれがアトムのなかで最小で最も滑らかな形態であるがゆえに、最初に動かされて動くからである。エピクロスは第四のアトムを、熱や風のアトムよりも微細であるがゆえに身体とより共感するとは述べていたが、魂を構成する他のアトムに感覚をもたらす運動を与えるとは位置づけていなかった。もちろんルクレティウスも魂の各要素がどのように結合して働いているかを説明することは、困難であるとしている（III. 258-260）。互いに入り組んで働いているために、どれか一

つが単独に切り離されたり、その能力が他から空間的に区別されて働いたりすることはあり得ないと言われ（Ⅲ. 263-265）、そのことは「動物の肉の中のいたるところに香りと色¹⁴⁾と風味があるが、それらすべてからは全体としてただ一つの肉片が構成される」ような例にたとえられている（Ⅲ. 266-268）。しかしながら、第四のアトムが感覚をもたらし、魂全体を、そして身体をも支配することは、続く次の箇所でも明らかである。

「この第四の力は運動の始め (initium motus) を自分から他のものに分かち、そこから感覚の運動が初めて肉全体を通じて起こるのである。すなわちこの第四の本性は、全く奥深くかくれひそんでいて、私たちの体の中でこれよりも深く秘められたものはなく、魂の全体に対して、そのまた魂にあたるものである。」（DRN. Ⅲ. 271-275）

第四のアトムの力は、「魂の全体に対してそのまた魂にあたるものとして、全身を支配している (dominatur)」(Ⅲ. 280-1) ののである。このルクレティウスの言明は、エピクロス之魂論では第四のアトムの優位性にふれただけで曖昧なまま残されていた魂の構造を、エピクロスの示唆する方向に従って明確にしたといえるだろう。魂に感覚や思考の最初の運動を引き起こすものが第四のアトムの力に同定され、魂を魂として形成する「魂の魂」と同定されたのである。しかし同時に、このような明確化は、原子論の原理を踏み破る危険を犯している。それは原子が形と重さと大きさ以外の属性をもたない、とするエピクロスの掲げる原子論の根本原則 (D. L. X. 54) に反するように思えるからである。

ただし、魂が身体を通して外部から受けた動きを、第四のアトムが受け取ることによって、感覚の最初の動きがもたらされるというだけなら、まだ原子論の枠組みにとどまるという弁護もあるかもしれない。しかしルクレティウスは、アトムからなる魂が身体を支配すると言明しているからには、そのことを突き詰めて考えれば、魂が身体を動かすと考えられる運動は、魂が発を与えると考えざるをえない。であれば魂のなかでは、第四のアトムにその最初のエージェントの働きを求めざるをえなくなる。最も微細で滑らかに運動しやすい第四のアトムが、運動の始めを自分から他のアトムに与えると記述せざるをえないのである。

ここにいたって第四のアトムには、自らの動を他のアトムに分け与えて、魂を魂として形成するよう働きが要請される。本来、形と大きさと重さ以外には属性をもたず、生命をもたない物質であるはずのアトムに、ルクレティウスは密かにある種の「物活論」を読み込まざるをえなくなっているのではなからうか。ルクレティウスは、第四のアトムに①感覚や思考の最初の運動を自ら生み出すこと、②魂を構成する異なるアトムを結合させ魂として統一させること、を要請していると考えられるのである。全く生命や意志を持たない物質による記述をすすめているように見えながら、いつの間にかその物質に生命的な要素や振る舞いを読み込んでいる危険がここにもあるといわねばならない。ルクレティウスは疑いなくエピクロスの原子論による生命・魂論を発展徹底させた。しかしその結果は、全く生命をもたない原子と空虚によって生命を記述するという古代原子論のモチーフの到達点と共に、限界をも呈示していると考えられるのである。

<結　　び>

以上見てきたように、ルクレティウスは、生命論や生物学的領域においても、エピクロスの理論を継承発展させている。ルクレティウスは、基本物体の一定の集合である種子という概念によって、生物の発生や成長のほか、遺伝といった現象さえも説得的に説明している（Cf. DRN. IV. 1209-1232）。さらに、その種子に生命を与えているのは物体からなる魂であり、その魂は *anima* と呼ばれて身体全身にいきわたっている部分と、その *anima* を通じて身体全体を支配する精神 *animus* と呼ばれる上位部分とに区分される。そのことによって、原子論に基づきながら精神の一定の優位性を述べるサイコロジーが可能になっている。そのような *anima* と *animus* の結合である魂は、風（息）と熱と空気と第四のアトムから構成され、そのなかでも第四のアトムが、感覚や思考を生み出す動を与えるものであり、魂の魂と呼ばれる。生命論の基底である魂を徹底的に分析する最終局面では、第四のアトムに、魂を構成する他のアトムへ感覚や思考を生み出す最初の動を与える力と、四種のアトムを一つの魂として結合し統合する力までもが要請されるのである。

アトムとアトムを統合するそのような力の問題は、後にエピクロス派から

ストア派に受け継がれ、火と空気からなるプネウマが宇宙全体に充溢しているという理論によって、より整合的な説明が試みられるようになる。17世紀のアイザック・ニュートンの万有引力の理論は、ストア派の物質的なプネウマの力をプラトンの非物質化したものとも考えられている。¹⁵⁾ しかしながら、ルクレティウスが「魂の魂」である第四のアトムに要請した内容自体は、本来、形と大きさと重さとしかもたず、意志も生命ももたないとした、エピクロスが掲げたアトム本来の規定を逸脱する。そのようなアトムとはいったい何か。そのようなアトムは永遠に名づけられないものと言わねばならない。

*本研究は、平成8年度科学研究費奨励研究「アトミズムにおける生命の研究」の研究成果の一部である。

註

- 1) Cf. Long. A. A., *Hellenistic Philosophy*, (1974), pp.18-92
- 2) 藤澤令夫, 『実在と価値』(1969), p.223 を参照。
- 3) 以下エピクロスの引用はすべてディオゲネスの『ギリシア哲学者列伝』による。
またその引用は、岩波文庫の加来彰俊訳の訳語に若干の変更した他は、ほぼそのままだった。
- 4) 藤澤令夫, 前掲書, p.250
- 5) Cf. Bailey. C., *Epicurus*, 1926, p.21
- 6) ルクレティウスの引用は、岩田義一・藤澤令夫訳『事物の本性について』, 世界文学全集21, 筑摩書房, 1965年から借用し、必要に応じた変更をくわえさせていただいた。
- 7) Cf. Brown. P. M., *Lucretius: De Rerum Natura I* 1984, p.80
- 8) Cf. Bailey. C., *The Greek Atomists and Epicurus*, 1928, p.344. ベイリーは、種子という言葉によって、個々の生物や無生物を生み出すように配置を与えられた生成の一定の段階をエピクロスが意味していたと主張できると述べている。
- 9) Cf. Kerferd. G. B., *Epicurus' Doctrine of the soul, Phronesis*, vol, X VI, 1971, pp.80-96
- 10) 岩波文庫の邦訳では「ルクレティウスは *amimus* と *anima* を無差別に、甚

だ漠然と混用している。もちろん詩形をととのえる必要からである」という註をつけている (p.115) が、そんな曖昧な理由からではない。

- 11) Cf. Kenny. E. J., *Lucretius: De Rerum Natura Book III*, 1971, p.106-7.
- 12) Cf. Leonard. W. E. and Smith. S. B. ed. *De Rerum Natura* 1942 (renewed 1970). p.444
- 13) 240行の *quaedamque mente necessest* は写本に乱れがあり、テキストを確定するのが困難である。Rouse & Smith(Loeb): *et quaecumque ipsa volutat*, Kenny: *et mens quaecumque volutat* など。ただし、テキストの意味するところは比較的明瞭である。
- 14) テキスト (Ⅲ. 267) は *calor* (熱) であるが、文脈から Lambinus に従い *color* をとる。
- 15) Cf. Dobbs. B. J. T., "Stoic and Epicurean doctrines in Newton's system of the world", in *Atoms, Pneuma, and Tranquillity*, ed. by Osler M. J., 1991. pp.221-238